

今号から3回にわたり、「SDGs」について連載します。初回の今回は、国連でのSDGs制定から日本の建築分野における動きを、日本建築家協会 六鹿正治会長に、SDGsのわかりやすい説明を国際担当理事 高階澄人氏に執筆いただきました。

『SDGs建築ガイド日本版』から SDGs建築フォーラムへ



日本建築家協会会長
六鹿正治

国連SDGsは社会と建築家をつなぐ共通語

『JIA MAGAZINE』に何回か書きましたが、2015年に国連で採択されたSDGsは、社会の「持続可能な開発目標」として2030年までに世界中で達成すべき17のゴールを掲げています。それらは先進国も発展途上国も共に取り組むべき普遍的な目標であり、「地球上の誰一人として取り残さない」ということを目指しています。日本でも国の各省庁をはじめ多くの自治体や企業が積極的に取り組みを進めています。

まずJIAの建築家の皆様には、この急速に社会に広がりつつあるSDGsの動きの広範さに注目していただきたいと思います。すなわち、すべての分野の人々がSDGsという共通語を使って社会の発展や開発の方向性についてコミュニケーションし始めたということです。それはまた国内にとどまらず、世界中の全ての分野の人々との共通語になり始めているともいえるのです。

『SDGs建築ガイド』

そんな中で、UIA（国際建築家連合）とデンマーク王立芸術アカデミーとデンマーク建築家協会の人々が『SDGs建築ガイド』を2018年末に刊行しました。これは「建築はSDGsのために何ができるか」を17のゴール別に事例をあげて解説したものです。このUIA版はなかなかよくできたガイドなのですが、残念ながら日本の建築が事例として1つも入っていません。編集に携わった人々が日本の建築をよく知らなかったのでしょうか。ならばいつそのこと、日本の建築家が設計した日本国内の建築を事例として、日本人のための「建築はSDGsのために何ができるか」について解説した本をJIAでつくったらどうか、ということになりました。それが『SDGs建築ガイド日本版』です。

3月に理事会決定をして編集執筆のための特別委員会を立ち上げました。特定の分野に偏らず広くJIA全体をカバーすることを象徴的に表せるように、全常置委員会の委員長に特別委員会の委員になっていただきました。

その上で事例案の推薦で全国の各支部長や全国会議議長にも協力を要請しました。

作業のかなり初期から、いやJIA編の日本版は日本人のためだけではなく、日本の豊饒な建築文化を通じて建築とSDGsの関わりを世界中に発信できるものにしたという思いが募りはじめました。そして完全和英併記でつくることになったのです。

『SDGs建築ガイド日本版』が出た

そして本当に多くの人々の献身的な努力のおかげで、遂に10月初めに『SDGs建築ガイド日本版』が刊行の運びとなりました。皆様のお手元にはもう届いているでしょうか。

国連SDGsの17のゴールごとに、建築や建築環境がそのゴールの達成について何ができるかが解説されています。そして1つのゴールにつき3つの建築事例が挙げられていて、それぞれどういう課題（Challenge）に答えようとしているか、どのように課題解決に貢献（Contribution）しているかが解説されています。

もとより、建築や建築環境だけでSDGsが達成されるわけではありませんが、他の分野との連携・協力の中においても、建築や建築環境が果たす役割が大きいということを再確認されることと思います。

なお、注意しておかなくてはならないのが、国連SDGsの簡潔に書かれた17のゴールは「見出し」のような役割であり、その字面のみでは理解不足や誤解に陥る場合があることです。その下にそれぞれ約10項目定められているターゲットを知ることも課題や貢献の理解に必要な場合があります。

SDGsと日本の建築

日本版とUIA版を比べて思うのは、国により地域によってSDGsのゴールの社会的な意味や受け止められ方、達成度、優先順位などが大きく異なるため、選定事例の組み合わせに独特の個性があるということです。3事例

ということに限定しなければ、さらにゴールが示すものの広がりを実感できるかもしれません。あるいは、知っている建築の中から、あなた自身の3事例を見つけてみるのもいいでしょう。

一方で、各建築家や注文主に今回の掲載許諾をいただく際に、躊躇や拒否をされた場合があったことも記憶に鮮明に残っています。特定の1つのゴールの事例として選定されることの可否が判断しにくかったためと思われる。確かに、17のゴールのどれか1つにしか貢献が該当しない建築というのはめったにありません。いくつかの建築のSDGs達成への貢献をマトリックスにして分析してみるのも勉強になるかもしれません。

日常の活動からSDGs建築フォーラム2020へ

『SDGs建築ガイド日本版』を使いながら、それぞれの地域や職域で、建築とSDGsについての認識を深めるさまざまな活動を行うことができます。建築家仲間勉強会をやったり、新しくできた建築の見学会のあとで

SDGsの視点から議論したり、いろいろな展開が考えられます。そしてもっと大事なのが、市民や企業や行政と共同で建築SDGsワークショップなどを開催して、建築家と社会のつなぎ目をより強くしていくことです。

そして、そういうふだんの建築とSDGsをめぐる多様な活動の緩やかで大きなうねりの先に、それらの活動のネットワークとして、企画の始まった「SDGs建築フォーラム2020(仮)」を捉えていきたいと考えています。

■『SDGs建築ガイド日本版』に頻出する単語

和英完全併記ですので、頻出用語に注目するとSDGsの本質にもっと迫ることができるかもしれません。

resilient (レジリエント)：回復力がある、立ち直る力がある、粘り強い、強靱な

inclusive (インクルーシブ)：包括的、誰でも受け入れる、排他的でない

affordable (アフォーダブル)：手の届く価格の、安価な、手頃な

sustainable (サステナブル)：持続可能な

built environment (ビルト・エンヴァイロメント)：建築環境、手を入れていない自然環境に対して建築環境

国連SDGsについて

—地球上におきている課題を
自分のこととして捉える—



国際担当理事
高階澄人

SDGs(エス・ディ・ジズ)という言葉がメディアに現れるようになって数年が経ち、この1年ほどの間にはさまざまな分野における取り組みの紹介などが数多く見られるようになってきています。

一方、2019年2月に電通が行った全国6,576人を対象としたSDGs認知度調査の結果では、その認知度は前回より1.2ポイント増えたものの平均16.0%(男性20.5%、女性11.6%、学生24.8%)にとどまっています。政府広報「ピコ太郎×外務省」(SDGs/Public Private Action for Partnership)のYouTube視聴回数も、2年間で31万回と、オリジナルPPAPの8600万回に比べて振るいません。2018年の別調査による世界の20カ国・地域におけるSDGs平均認知率51.6%に比べ、日本の認知率の低さは際だっています。

「SDGsという言葉は知っているけれど詳しい内容についてはちょっと…」というJIA会員に向けてわかりやすい説明を、という広報委員会からの依頼を受けてSDGsについてのごく基本的な解説をします。

まず、国連のサイト^{*3}ではSDGsの目的について下記のように説明しています。

SDGs「Sustainable Development Goals(持続可能な開発目標)」とは、全ての人々にとってよりよい、より持続可能な未来を築くための青写真です。貧困や不平等、気候変動、環境劣化、繁栄、平和と公正など、私たちが直面するグローバルな諸問題の解決を目指します。SDGsの目標は関連しています。誰一人置き去りにしないために、2030年までに各目標・ターゲットを達成することが重要です。(国連広報センターHPより引用)

次に、日本の外務省のサイト^{*4}にはSDGsの経緯と先進国としての方針が示されています。

SDGsは2001年に策定されたMDGs(ミレニアム開発目標)の後継として、2015年9月の国連サミットで採択された国際目標です。持続可能な世界を実現するための17のゴール・169のターゲットから構成され、発展途上国のみならず、先進国自身が取り組む普遍的なものであり、日本もこれに積極的に取り組んでいます。(外務省HPより引用)

17の具体的な目標(ゴール)は下に示されるように、カラフルなアイコンにより誰にでもわかりやすくビジュアルに訴求されています。

はじめの6つのゴールは、貧困や飢餓、健康と教育、安全な水、など主には開発途上国のみを対象としているように見えますが、「子供の貧困」や「ジェンダー平等」など、日本のゴールとしても当てはまるものも含まれます。次の7~12のゴールはクリーンエネルギー、経済成長、技術革新、まちづくりなど多くの先進国に共通する課題に対する目標と言えます。もちろんその全てが日本も達成すべきゴールに当てはまります。最後の13~17のゴールは気候変動、豊かな地球生態系の保全、平和と公正、パートナーシップなど全地球全世界を包括する目標です。

目標に掲げられる項目、たとえば「水」「教育」「産業」などの世界各国における現状レベルには当然のことながら格差があり、また「貧困」「不平等」などをもたらす原因もさまざまであるため、同じゴールであっても国や地域により直面する課題もその解決策も大きく異なります。SDGsの優れたところは、それらをすべて包括するよう普遍的な目標を示すと同時に、極めて具体的な「事実と数字」を掲示しているところです。世界レベルでの視点をもって地球の課題を捉えつつ、それぞれの地域の問題に向き合う、といったような態度を地球上のすべての人々に促すシステムとなっているのです。

平易な言葉で表すと「地球上におきているあらゆる課題を、ひとりでも多くの人が自分のこととして捉え、その解決に向かって行動するための目標を示す」ことがSDGsのメインコンセプトであると思います。

17の「目標／ゴール」はその下に169の具体的な「達成基準／ターゲット」を伴い、さらに効果を測定するための232の「指標／インデックス」が設定されていることから、SDGsは大きく3層の構成となっています。ここですべての階層と項目を示すことはできませんが、外務省のウェブサイト「SDGグローバル指標^{*5}」としてゴールごとに検索できるようにまとめられています。

都市・建築環境に関わる建築家にとって、SDGsは業務上の指標や目標、また社会との共通言語ともなる普遍的で重要な視点といえます。ひとつの建築だけで地球規模のゴールを解決することが難しいのは明らかですが、人々の生活の器を扱う職能であるからこそ私たちは日々必然的にSDGsの複数のゴールに同時に関わっています。またビジネスの世界ではESG (Environment, Social, Governance) という指標があり、同じ「持続可能な世界の実現」をSDGsと双輪となって支える動きが世界のトレンドとして加速していることも、建築界としては見逃せません。この『Bulletin』の特集と『SDGs建築ガイド日本版』の刊行を機会に、SDGsの視点からご自身の携わっているプロジェクトとその周辺環境を眺めてみてはいかがでしょうか。

- *1 第2回電通SDGs生活者調査 <https://dentsu-ho.com/articles/6615>
- *2 PR動画「ピコ太郎×外務省」
<https://www.youtube.com/watch?v=H519RHeAT10>
- *3 国際連合広報センター「SDGsとは？」
https://www.unic.or.jp/news_press/features_backgrounders/31737/
- *4 外務省「持続可能な開発目標とは」
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/about/index.html>
- *5 外務省「SDGグローバル指標」
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/statistics/index.html>

(SDGs 17のゴール (開発目標))

